

第二回 桐壺 その二

(本文講読に入る前のお話は、本テキストでは削除しております)

人よりさきにまもり給ひて、やむことなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御かたの御いさめをのみぞ、なほわづらはしう、心苦しう思ひ聞えさせ給ひける。

かしこき御かげをば頼み聞えながら、おとしめ、きずを求め給ふ人は多く、わが身はかよわく、ものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞし給ふ。

【口訳】

この右大臣家の女御は、他の女御更衣よりは先に宮中に入内なされて、帝のありがたい御思いも並々ではなくて、またお子様かたもいらっしやうて、帝はこの方のおいさめのお言葉だけは、重く心にかけて、気になさっていらっしやる。

桐壺の更衣は、帝の大変恐れ多いお恵みを心の頼りと申し上げていながら、宮中の奥の方々は、自分をおとしめ、欠点をお探しになる人々ばかり多くて、しかも身はひ弱であって、非常にはかないご様子で、帝の格別のご寵愛がかえってつらいというような、物思いをなさっていらっしやる。

【語釈】

「御子たちなどもおはしませば」 既に「一の御子」があることは前に出てきたが、ここでさらに「御子たちなどもおはしませば」と言っていることから、お子様は一人だけではないことが分かる。実際は、一の御子である男御子と、ほかに女の御子がある。

「なかなかなるもの思ひ」 「なかなか」は「かえって」の意。「なかなかなるもの思ひ」は、この場合、天子様の格別のご寵愛がかえって今の私にとっては苦しい重荷になっているという更衣の物思いである。別に恨んでいるというほどではない。しかし、この格別に深い自分に対するご寵愛が、かえって私には耐えられないありがたさなのだ、それが辛さついでにいますといつづつな、そんな物思いの様子である。

【評釈】

この箇所、前の段落のところは、右大臣家から出た女御のことを言っている。そして後の段落では、桐壺の更衣のことを言っている。こういうところが、『源氏物語』の文章を難しく感じさせる。『源氏物語』の文章を我々現代人が読むのに一番最初とつつきにくいのは、主語がほとんど示されておらず、その主語は文脈で読む者が察していかなければならないことである。殊に近代以降の日本人は、ヨーロッパの合理的な文体に慣れてきているので、ことさらにこ

れが難しい。ヨーロッパの文体は、主語をはつきり出す。主語のない文章は文章ではない。ところが、日本のこつこついう古文は、主語をあからさまに出さないことがほとんどである。また、時間の関係も決して合理的に整然と文章の上に出してこない。しかし、そういうところがかえって文章の陰影の深さ、含みの細やかさというものになっている文体である。

「人よりさきにまゐり給ひて、やむことなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはせしませば、この御かたの御いさめをのみぞ、なほわづらはじう、心苦しう思ひ聞えさせ給ひける」。

この一文の中で、途中から主語が帝のことになっていくが、前段は、右大臣家の女御のことを述べている。この女御は、もう少しくくと、弘徽殿の女御という名で呼ばれるようになる。弘徽殿という御殿を賜っている女御である。そして、この弘徽殿の女御を中心とする右大臣家の人々が、光源氏にとって大きなライバルになってくる家筋である。しかし、そういうことを最初に、物語の粗筋のように全部種明かししてしまつては、物語は面白くない。推理小説の種明かしを最初からすることはないように、『源氏物語』の話の運び方も、少しずつ、少しずつ語り加えていく。聞いている者は、だんだんと読み進み、語り進められていくにつれて、物語のスケールの大きさ、あるいは深さが少しずつ、眼前に開けてくるような感じがあるのである。こういうところも実に見事な構成を持っているといえるであろう。それは一つは紫式部の才能の優れている点であるが、同時にまた、日本の物語がそういう不思議な魅力を持っている。初めから主人公をあからさまにばつと出してしまわないのである。

第一講においても述べたように、主人公の生みの親、あるいは生みの親でない場合にも、「おじいさんとおばあさん」「育ての親」「発見の親」というようなものを語り出してきて、そこからだんだんと誕生の奇瑞、成長の異常さを語り加えていく。身近な、昔話の『桃太郎』や『すねこ・たんぼ』や『一寸法師』『かぐや姫』、みんなそういう語り方で語っていく。結局、これは神話の名残であり、神話の持っている、人を引きつけ人の心を吸収してしまつような魅力、そういうものの末裔の姿ということであろう。

「この御かたの御いさめ」。

右大臣家の女御の御いさめ、帝に対する諫言。昔から、最初のお后は、たいてい男性よりも年上で、人身体験も豊かに持っている。そして男女の愛のあり方を手ほどきし、教える、そういう年上の女房である。

柳田国男の『妹の力』という本の中に、姥あるいは叔母と呼ばれる年上の女性、若い男に与える様々な援助、助言、あるいは愛情、そういうものが日本の古代からの生活にずっと続いてきていることがいろいろ述べられている。

「倭建神話」におけるおばの倭姫の役、『万葉集』で言えば、若き大伴家持にとつてそういう役割をしてくれたのが大伴坂上郎女という叔母である。家持が越中の国へ二十代の終わりころ国司として赴任していくときに大伴坂上郎女

が家持に送った歌などにあらわれている叔母としての思いもそれである。

こつした年上の女性の役割が、後世も最初の后の上に似た形で保たれている。だから、帝としても、たくさん女御更衣がいるのだが、その中でこの右大臣家から入った最初の妻は格別の重みがあるのである。

「なほわづらはしう、心苦しつ思ひ聞えさせ給ひける」。

しかも、今、桐壺の更衣に対する格別の偏愛とも言つべき寵愛が問題になっているのだから、とりわけ、この女御の諫言を、重く心にかけて、気になさつていらつしやる。「思ひ聞えさせ給ひける」は最高敬語であるので、ここのところは、帝のことについて言っているといつことが分かる。

御つぼねはきりつぼなり。あまたの御かたがたを過ぎさせ給ひて、ひまなき御まへ渡りに、人の御こころを尽くし給ふも、げにことわりと見えたり。まうのぼり給ふにも、あまりうちしきる折り折りは、打ち橋渡殿のこかしこの道に、あやしきわざをしつゝ、御送り迎への人のきぬの裾たへがたく、まさなき事もあり。又ある時には、えさらぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた心をあはせて、はしたなめわづらはせ給ふ時も多かり。事にふれて、かず知らず苦しき事のみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれと御覽じて、後涼殿にもとより侍ひ給ふ更衣の曹司を、ほかに移させ給ひて、うへつぼねに賜はす。その恨み、ましてやらむかたなし。

#### 【口訳】

この更衣の宮中で与えられているお控え場所は桐壺である。たくさんのはかの女御更衣などのお局の前をお通りあそばして、しょっちゅうの帝のお出かけに、また、他のお后たちがいろいろいる気をおもみになるのももつとものことだと思われる。また、桐壺の更衣が帝のところへ参上なさるときにも、余りに繁々と回数重なっていくその折々には、打ち橋や渡殿などのあつちつちの道に、くり返し何ともけしからぬ仕掛けをして、そのために、送り迎えをする人たちの着ている着物の裾が、耐えがたく、ただならぬこともあった。またある時には、そこをよけては通れない馬道の戸を閉ざしておいて、こちら側とあちら側と心を合わせて、いたたまれない状態にさせ、苦しめられることが多かった。こうした事につけて、苦しいことが多くて、更衣がひどく思い悩んでいるのを、帝は大層心にしみてあはれなものとお覧あそばして、後涼殿に以前からいらつしやつた更衣の曹司をよそへお移しになってしまつて、この桐壺の更衣に、天子のお側近いところの控え場所として与え賜つた。遠くへ退けられてしまつたその更衣の恨みは、何とも晴らしようがないほど激しかった。

#### 【語釈】

「まうのぼり給ふ」 ここのからが更衣の行為である。桐壺の更衣がお召しを受けて、帝のところへ参上なさる。

「打ち橋」 御殿と御殿の間の取り外しのできる板の橋。

「渡殿」 渡り廊下。「馬道」などよりは小さい。

「あやしきわざをしつつ」「けしからぬ仕掛けをして。」「しつつ」「の」「つ」は、反復繰り返しをあらわす用法。

「まさなき事もあり」「まさなき事」というのは、ただならぬこと。具體的に言っていないが、恐らく汚物などを密かにまき散らしておいて、長く引いている着物の裾がひどく汚れてしまつたというような仕掛けであろう。閑鎖社会の中の女の憎しみである。

「えさらぬ」そこをよけては通れない、回り道などできない。

「馬道の戸をさしこめ」「馬道」は御殿の真ん中をずっと通っている広い廊下。そのこちらの端と向こうの端に戸が立ててある。それを閉めてしまつて通れないようにする、ということのである。

「思ひわびたる」「思ひわび」は悲観してしまつた。

「後涼殿にもとより侍ひ給ふ更衣の曹司を」 清涼殿の西隣の後涼殿に以前からはべつていらつしやる更衣の控え場所を。

「うへつばねに賜はず」 前からいた人を退けてしまつて、桐壺の更衣に、帝のお側近い控え場所としてお与えになつた。

「その恨み、ましてやらむかたなし」 遠くへ退けられてしまつた、もとのからの更衣のその恨みというのは、何とも晴らしようがないほど激しかった。桐壺の更衣は、こういう恨みを幾つも背負っていかなければならなくなるのである。

#### 【評釈】

「御つばねはきりつばなり」

「この更衣の宮中で与えられている控え場所は桐壺である。ここで初めて「桐壺の更衣」と呼ばれる背景のことが出てくる。「壺」というのは「与えられて」いる女房の部屋の壺庭、壺前つばせま裁すなわち中庭である。そこに植えてある植物の種類によつて、何壺、何壺という女房たちの通称にもなる。桐の木が植わっているから桐壺、藤が植わっていれば藤壺、梅が植わっていれば梅壺である。後に、成長した光源氏が、父の帝の最も寵愛深い女御に自分の亡き母の面影を求めて心ひかれていく方は、藤壺の女御と言われる。

桐壺の更衣は、それほど身分が高いわけではないので、宮中での控え場所も、天子のいらつしやる清涼殿からかなり離れているところにある。身分の高い女御たちには、常の控え場所の他に、天子のお居間に近い控え場所、上の局といふものを与えられている。桐壺の更衣はまだ初めはそれがなかった。やがて、それが与えられるのだが、そのこともまた人々のねたみを買う大きな原因になつてゆく。

「あまたの御かたがたを過ぎさせ給ひて」

これは、桐壺の更衣のことだと見る見方もあるが、「御つばねはきりつばな

り」で切れて、「あまたの御かたがたを過ぎさせ給ひて、ひまなき御まへ渡りに、人の御こころを尽くし給ふも、げにことわりと見えたり」は、帝の格別の寵愛ぶりであるので、帝の方から桐壺の更衣のところへ通ってこられる、そのことを言っているのだというふうに見る説が、この書き方から見てもよいように思う。「御つぼねはきりつぼなり」からずっと続けて、更衣が帝のところへ夜上がっていく、そのことを言っているのだという解釈でも、文章は通るが、この部分は、普通は女の方、女御更衣の方から天子のお側へ上がるのだが、また、天子自らが出てこられるということも決して例のないことではない。殊に桐壺の更衣に対しては、人目もはばからぬご寵愛ぶりであるので、天子様の方から、異例だけでも、出かけていらっしやるらしい。そのときに、たかさんのほかの女御更衣の控え場所の前をお通りあそばす、という帝の行為をあらかわしていると取っておく。

「曹司」

控え場所のこと。後に武士の時代になって、次男坊、三男坊といった男子に控え場所を与えるが、彼らは、運が悪ければそのまま一族の頭にはなれない。つまり長男が健在である限り、一番手、三番手の役割で、控えの順番を待っているよりほかしようがない。そういうのが御曹司である。義経などは九郎、九番目の御曹司である。そんなふうには、「武家の御曹司」という使われ方になるのは後のことで、もともとは宮中の女性の控え場所である。

この御子みつになり給ふ年、御はかまぎのこと、一の宮の奉りしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、いみじうせさせ給ふ。それにつけても世のそしりのみ多かれど、この御子のおよすけもおはする御かたち心ばへ、有り難く珍しきまで見え給ふを、えそねみあへ給はず。ものの心しり給ふ人は、かゝる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで、目をおどろかし給ふ。

【口訳】

この御子が三つにおなりになった年、御袴着の儀式を、あの一の御子があそばした格式に劣ることなく、内蔵寮、納殿などに収納せられているものの限りを尽くして、大変すばらしくお誉みあそばした。そのことにつけても、また世間の非難が多かったけれども、この御子がだんだん成長なすってゆく、その御姿かたち、あるいは御心のありようがまことに結構で、ほかに比べようがなく格別でいらっしやる様子を、ねたみ通すこともようならぬ。ものの道理を知っていらっしやるお人は、これほどまでにすばらしい御子も、世の中にはお生まれになってくるものなのだ、と驚きあきれるほどに目を見張ってびびくりなすっていらっしやる。

【語釈】

「御はかまぎのこと」 男性にも女性にも、幾つかの通過しなければならぬ折り目の段階がある。その最初の一つ。男の場合は袴着、女の場合は裳着である。

「内蔵寮、納殿」 内蔵寮は、宮中の宝もの、献上品などを収納してあるところで、中務省の管理。納殿も、宮中代々の御物を保管してゆくところ。「いみじうせさせ給ふ」「いみじ」は程度の非常に甚だしいこと。大変すばらしくその儀式をおさせあそばした。

「有り難く珍しきまで見え給ふ」「珍し」は数が少なく珍重すべきこと。「えそねみあへ給はず」 ねたみ通すこともよつなならないで。

「ものの心しり給ふ人」 ものの道理を知っていらつしやるお人。

「あさましき」 驚きあきれる意の形容詞で、善い場合にも、悪い場合にもいう。ここでは肯定的に、御子の不思議な魅力に呆然としている。

その年の夏、御息所はかなき心地にわづらひて、まかでなむとし給ふを、いとま、さらに許させ給はず。年頃、常のあつしさになり給入れば、御目馴れて、なほしばしこころみよ、とのみ宣はするに、日々に重り給ひて、ただ五六日のほどに、いと弱うなれば、母君なくなく奏して、まかでさせ奉り給ふ。かゝる折りに、あるまじき恥ぢもこそ、と心づかひして、御子をばとどめ奉りて、しのびてぞ出で給ふ。

【口訳】

その年の夏、御息所はちょっとした病気から、だんだんと状態が重くなつていかれて、宮中から下がって里で治療なさるうとするのを、帝は一向にお許しにならない。年頃、病気が重つた状態というのが常の状態という感じでいらつしやるからして、帝もすっかり見慣れておしまいになつていて、なおしばらくここにとどまつていて様子を見ていよ、とばかりおっしゃっているうちに、更衣は、日々に状態が重くおなりになつて、ほんの五日六日の間につくりと弱つておしまいになつたから、母君が、泣く泣く帝に奏上して、宮中を退出させなされた。こんなときに、あつてはならない恥などを受けるようなことがあつてはと用心して、この御子を宮中にとどめ申しておいて、こつそりと御退出になつた。

【語釈】

「その年の夏」 三歳の袴着も終わつた後の夏。

「御息所」 本来は天皇の御寝に侍した宮女の意から、さらにその天皇の御子を宿した人。ここでは、桐壺の更衣のこと。

「年頃、つねのあつしさになり給入れば」「年頃」は、ここ一二年、という感じ。「つねのあつしさ」は、病気の重い状態が常の状態のことになつた。

「御目なれて」 帝もすっかりそつちう状態を見慣れておしまいになつて

いで。

「なほしばこころみよ」　もうしばらく宮中にとどまっていた様子を見ていよ。

「母君」　更衣の母。御子にとっては祖母にあたる人。主人を亡くして、娘の宮仕えに心を尽くしていた母君。

【評釈】

「」の御子をばとどめ奉りてしひびてそ出で給ふ」。

御子は宮中にとどめておいて、母の更衣だけが非公式にこつそりと退出した。ここでもう宮中から桐壺の更衣は出ておしまいになったのだが、話はなお行きつ戻りつする。それが物語特有の語り方である。

限りあれば、さのみもえ止めさせ給はず、御覧じだに送らぬおぼつかなさ  
を、いふかたなく思ほさる。いとにほひやかに美しげなる人の、いたつ面  
やせて、いとあはれと物を思ひしみながら、言に出でて聞えやらず、あ  
るかなきかに消え入りつつ物し給ふを、御覧するに、きしかた行く末おぼ  
しめされず、よろづの事を泣く泣く契り宣はすれど、御答へもえ聞え給は  
ず、まみなどもいとたゆげにて、いとどなよなよと、われかの気色にて臥  
したれば、いかさまにと、おぼしめしまどはる。てぐるまの宣旨など宣は  
せても、また入らせ給ひて、さざにえ許させ給はず、「限りあらむ道にも、  
おくれ先だたじと契らせ給ひけるを、さりとも、うち捨ててはえ行きやら  
じ」と宣はするを、女も、いとみじと見奉りて、

「かぎりとて別るゝ道の悲しきにかまほしきは命なりけり

いとかく思つ給へましかは」と、息も絶えつつ、聞えまほしげなる事は  
ありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもなら  
むを御覧じはてむ、とおぼしめすに、「けふ始むべき祈りども、さるべき  
人々うけたまはれる、今宵より」と聞え急がせば、わりなく思ほしながら、  
まかでさせ給ふ。

【口訳】

ものには限りがあつて、帝もそうそうはどこまでもお止めになることがあ  
きにならない。ご自分でお見送りすらなさない、その心もなさを、何とも  
言いようもなく悲しくお思いあそばしている。大層ほのぼのと美しく可憐な  
人が、ひどく面やつれがして、しみじみと人の世の無情さが心にしみながら、言  
葉に出して申し上げることもできず、正気を失っておしまいになったのかと思  
われるような状態で、すっかりぐったりとしてしまつていらつしやる、そつ  
う状態でいらつしやるのを御覧になるにつけて、今までのこと、これからのこ  
と、判断なさることもおできにならずに、万事につけて泣く泣く(男女の愛の  
心の)約束をなさるけれども、それに対して、もうはきはきとお返事すらもお  
つしやることができずに、目つきなども大層けだるそつで、体もぐったりとし

てしまつて、われか人が分らないような正気の失われたようなご様子で物に寄り臥していらつしやるので、一体どうしたらよかるつかとお思い惑いあそばす。手車の宣旨などを仰せ出されてからも、また更衣の控えの部屋へお入りあそばして、一向にお側からお離しになるご様子がない。「限りのある人間の生き死の別れの道にも、いつも一緒で、遅れたり先だつたりすることはしまいかねてお約束なさつていたものを。いくら何でも、あなた一人で私をうち捨ててはお行きなさるまい」そう帝がおつしやるのを、更衣も、大層しみじみとお見申し上げて、

(更衣)「かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

(歌意)「今を限りとして生き死にの別れをたどっていきますその道が、悲しく思われ  
ますのに、そのことにつけてもなお生きていたいと思ひますのは、命でござります。

こんなふうになるうと前から存じておりましたら」と、息も絶え絶えになつて、申し上げたい言葉がありそうだけれども、大層苦しうで、ぐつたりしているからして、いつそのままにしておいて、どうにもこうにもならう果てを御覧じ尽くそうと帝はお思いあそばすのに、「きょうから始めるはずになつております加持祈禱などを、然るべき法力、功力の強い人々が承つております。そのことを今晚から始める手はずになつております」と申し上げ、急がせるからして、帝は納得いかない気持ちでいらつしやうながら、退出おさせあそばす。

#### 【語釈】

「限りあれば、さのみもえ止めさせ給はず」　こういつときの決まりがあつて、帝でもとことんまでお止めになるといふことがおできにならない。

「いとにほひやかに美しげなる人」　大層ほのぼのと美しく可憐な人。

「いとあはれと物を思ひしみながら」　非常にしみじみと人の世の無情さが心にしみながら。

「あるかなぎかに消え入りつつ物し給ふ」　正気を失つておしまひになつたのかと思われるような、すっかりぐつたりとした状態でいらつしやる。

「きしかた行く末おぼしめされず」　「きしかた行く末」あるいは「こしかた行く末」どちらも使う。今までのこと、これからのこと。

「契り宣はすれど」　「契る」は男女の愛を約束する。帝があれこれと約束をなさるけれども。

「まみなどもいとたゆげにて」　目つきなども大層げだるそう。

「われかの気色にて」　われか人が分らないような正気の失われたご様子で。このころの「臥す」の用法は、必ずしもべつたりと体全体を横たえて寝ることだけに限らない。この場合も、長々と寝ておしまひになつていてというよりは、むしろ物に寄り臥していらつしやる、上体を物に寄りかけて、体を楽に伸ばしている様子であろう。

「てくるまの宣旨など宣はせて」　「手車」は、簡便な車、お乗物。「手車の宣旨」はそのお車を宮中で使うことができるという臨時の天子のお言葉。その宣旨がなければ手車を宮中から出せない。



「さらに許させ給はず」 一向にお側からお離しになる様子がない。

「限りあらむ道にも、おくれ先だたじと契らせ給ひけるを、さりとて、うち捨ててはえ行きやらじ」 天子の嘆きの言葉。おろおると嘆きの言葉を口説いておられる様子。

「いとみじと見奉りて」 大層ひどく辛いことだとお見申し上げて。更衣の気持ち。こういうときに一番大事な歌の形で自分の思いを表現する。ここに歌がなかったら、物語の柱がないようなものである。

「かぎりとして別るゝ道の悲しきに」 今を命の限りとして、別々にたどってゆきます道が何とも悲しゅうございませすにつけても。

「いかまほしきは」 「生きていたい」と、道を「ゆかまほし」を掛けている掛詞。

「いとかく思う給へましかば」 これも更衣の言葉。私が心に前もってわきまえておりましたならば。

「かくながらともかくもならむを御覧じはてむ」 いっそのままにしておいて、どうにもこうにもならつ果てを御覧じ尽くそう。

「けふ始むべき祈りども」 きょうから始めるはずになっている加持祈祷のこと。このころ、重い病気を治すという一番効果的な手だては、医師はまだ進んでいないので、法力のあるお坊さんや陰陽師に加持祈祷をさせることが、一番効果のある治療法であった。

「わりなく思ほしながら」 納得いかない気持ちでいらっしやりながら、退出おさせあそばす。

【評釈】

桐壺の更衣の別れにあたって、これだけのことがまたさらに語り加えられる。『古事記』や『日本書紀』でも、天孫邇邇芸の尊が高天原から下ってくる場面で、真床追衾などのベールに包まれて、下ったのかなと思つと、またもとの段階から語り始める。こういうところが、物語の非常に古くからある一つの語りぐせである。綿々として断ちがたい思いが、そういう語り方によって一層深まってくる。

「いほひやか」

古代歌謡や『万葉集』に、「いほへる妹」という語彙がある。例えば、「紫草のいほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも」。非常に鮮烈に目に飛び込んでくるような色彩感覚が『万葉集』の「いほひ」であるが、この時代の「いほひ」はもつとかすかな感じで、「いとにほひやかに美しげなる人」は、大層ほのぼのと美しく可憐な人の意。

「いほひやか」

「しみじみと物を感じる」と、「しみじみと悲しく思つ」のか、「しみじみとつれしく思つ」のか、それは前後の言葉や文脈で変わる。心にしみて思いしむこ

とが「あはれ」である。

「かぎりとして別るゝ道の悲しきにかまほしきは命なりけり」

一番大事なときの心の表現は歌の形で表出する。今、我々の見る『日本書紀』の非常に古いところで、当然歌があるべきところで歌がないのは、伝え伝えしているうちに失われてしまったり、あるいは天壤無窮てんじやうむきゆうの神勅しんちやくとか、稲穂の神勅いなほのしんちやくというように、外来の文章の形が大事にせられて、歌と入れ代わってしまったのである。それが海外の人たちにも見せる、整った、より高い歴史的記述の方法だと考え、変えてしまったのである。そういうところは、『古事記』の方が『日本書紀』と比べるとわりあい古い形を残しているのである。

「いかまほしきは命なりけり」

このような緊迫した場面の歌でも、縁語や掛詞を使う。日本人の和歌の上の縁語・掛詞というのは、単なる表現技巧ではないのである。古代歌謡の一つ一つの言葉は、幾つもの大事な働きの内容を持っている。古代の言葉は多義性を持つものであり、その多義性を最も著しく凝縮したのが和歌である。従って、一つの言葉は一つの意味、一つの内容をさす、というふうには単純には古代人は考えなかったのである。一つの言葉に大事な内容を幾つも幾つもと与えている場合がある。さらに、一首の歌が幾つもの幾つもの大事な役割を果たすための内容を持っている。そういう内容を深めていくために、縁語とか、掛詞とか、あるいは枕詞という特別な力を持った言葉が、重層して使われることが大事だったのである。やがて五七五七七という短い形に凝縮してくれば凝縮してくるほど、一つの言葉に、あるいは一つの文体の中に幾つもの深い広い内容を与えようとした。あるいは本歌取りという形も生まれた。古歌の一部分をさらに新しい歌で受け継いで、その古歌の持っている内容を受け継ぎながら新しい内容を生み出していこうとしたのである。

それから、引歌というものがある。これは日本の和歌の一部分を引いたり、漢詩の一部分を引いたりするものだが、これも本歌取りと同じようなことである。それは、実はその歌のその言葉の一部分だけを引いてきた、というような単純なことではない。その一首の歌の内容をほうふつとして、短い言葉で読者に連想させようとする、そういう意図があるのである。

「いとかく思ふ給ましかば」

「この言葉は短く、そして途中で言いさしてやめてしまっている。哀切で重い言葉である。つまり帝の格別な寵愛が大変ありがたいのだけれども、それが積もって、人々、先輩や朋輩たちの恨みを重ね重ね負って行って、こんなふうになってしまった。こういうことが前もってもう少し私に分かっておりましたら、私が自覚しておりましたら……」。ここで言いやめてしまふ。これから先をさらに言つと、帝を非難したりするような言葉になってくるので、ここでもう終わっているのである。

御胸、つとふたがりて、つゆまどろまれず明しかねさせ給ふ。御使ひの行きかふほどもなきに、なほいぶせさを限りなく宣はせつるを、「夜中うち過ぐるほどになむ、絶えはて給ひぬる」とて泣きさわれば、御使ひも、いとあへなくて帰り参りぬ。

【口訳】

天子様は御胸がびったりとふたがっておしまいになって、少しの間もお眠りになることができず、夜を明しかねあそばしている。まだ宮中からの見舞いの使いが戻ってくる時間もないうちに、帝はそのお気持ちがふさがって、どうにもならない気持ちをおっしゃっていたが、「夜中過ぎるころに、お命絶え果てておしまいになりました」と更衣の家の者が泣き騒ぐので、お使ひの者もどうにもしようがなくて、虚しく戻ってきた。

【語釈】

「まどろむ」「まどろむ」の「ま」は目、「とろむ」はとろとろすること。

「いとあへなくて帰り参りぬ」 宮中からのお使ひの者もどうにもしようがなくて、虚しく戻ってきて、そしてそのことを報告したのである。

【評釈】

桐壺の更衣は、非常に際どい状態まで宮中にいられたのである。もう少し遅れて、宮中で息を引き取っておしまいになったということになったら、これは大変なことであった。死の汚れというものは当時は非常に重い。もつと古代、飛鳥などでは、天子が変わるたびに都がこちらの字から向こうの字へというふうに移っていつている。都がもう少し永續性を持っていたら、あの時代の都ももつと大きくなったのであろうが、天子が変わるたびに、同じ狭い飛鳥の中で転々と移っているのである。それはなぜだろう。本当は詳細にはまだ分かっていないのだが、一番大きく考えられているのは、やはり天子の死の汚れというものを嫌ったのであろう。天子以外の者でも宮中で亡くなるということとは、大きな汚れになる。その前に里へ下がってきておいてよかったのである。

きこしめす御こゝろまどひ、なにごともおぼしめし分かれず、こもりおはします。御子は、かくてもいと御覽せまほしけれど、かかるほどに侍ひ給ふ例なき事なれば、まかで給ひなむとす。なにごとかあらむともおぼしめさず、さぶらふ人々の泣きまどひ、うへも御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見奉り給へるを。よろしきことにだに、かかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれにいふかひなし。

【口訳】

その更衣の死をお聞きあそばす帝の御心惑い、何事につけても判断あそばすことができなくて、ひたすら引きこもっていらつしやる。御子は、このままお手もとに置いて、御覧あそばしたいお気持ちだけれども、こういうときに、御子を宮中にとどめてお置きになることは例のないことだからして、宮中から退出なさろうとする。若君は、一体何が起こったのかともご判断がおつきにならないご様子で、お側に仕えている人々が泣きまどい、また帝までも御涙の絶えることなくいらつしやる、その様子を変なくあいだとお見申し上げていらつしやる。普通の場合でも、こういう別れというものは悲しくないわけではないものであるが、ましてこの場合はしみじみと悲しみが胸に迫って、何ともいいようのないほどである。

#### 【語釈】

「御子は、かくてもいと御覧ぜまほしけれど」 帝は、亡くなった更衣が残していった御子をこんなときに自分の側に引きつけておいて、御覧になりたいお気持ちだけれども。

#### 【評釈】

「なに」とかあらむともおぼしたらす、さぶらふ人々の泣きまどひ、うへも御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見奉り給へるを。」

まだ本当に幼い御子だから、一体何が起こったのかともご判断がおつきにならない。ここは、非常にあはれ深いところである。殊に聞いている女房たちはたまらなくなるような場面であつたらう。

「このところだが、少し歴史的な背景を述べておくと 『源氏物語』はいつの時代を心に置いて語られているか、聞く方の側もいつの時代と聞いて聞いているかという問題にもつながっていくが、こういう身近な人の忌服については、延喜七年に七歳以下の者は喪に服することは必要でないという定めが出ている。それによれば、まだ三つの若宮は、母の更衣の喪に服する必要はないことになる。従って、この物語は延喜七年の定め以前のことなのだとということとを、聞いている者にも分からせるつもりで恐らく語っているのだとあつたらう。

つまり、『源氏物語』は、当時の一条天皇の御世よりも一世紀ほど前のことと設定されて語られている。ちょうど今から見れば、明治維新より少し後のころの時代と思えばよい。もっとも近代の百年とこの頃の百年の感覚とは非常に違うので、あまり効果的な例ではないが、とにかく、わりあいに近いけれども、少し昔のこと」という感覚である。その時代設定によれば、この幼い御子は慣例に従い、服喪で里下がりする。また、そのことが更衣の死を一層効果的なものとする。なぜならば、この後、里へ下がっている御子を思う帝のお気持ち、あるいは御子の養い親になっていかなければならない更衣の母親の気持ち、そのやりとりなどがこれからの話の中に展開してくるからである。そういうことを一層効果的にする一つの大事な設定でもある。

かぎりあれば、れいの作法にをさめ奉るを、母北の方、「同じけぶりにのほりなむ」と、亡きこがれ給ひて、御送りの女房の車に慕ひ乗り給ひて、愛宕あきたぎといふ所に、いといかめしうその作法したるに、おはし着きたるこゝち、いかばかりかはありけむ。

【口訳】

定めがあるからして、こういつときの作法どおりに葬送の儀礼をなさるのだが、更衣の母の北の方は、自分も同じ煙になってこの世から姿を消してしまいたいと、亡き娘をお慕いなさって、御葬式に出かけていく女房の車に追いかけてお乗りになって、御葬式の場の愛宕といふ所で、大層厳肅にご葬儀の式次第をなさっているところへ、ご到着なさったそのお気持ちは一体どれほどであったろうことか。

【語釈】

「愛宕といふ所に」 京都市東山区鳥辺野の附近。平城遷都ののち、葬場と定められた。

(母)「むなしき御からを見る見る、なほおはするものと思ふがいとかひなければ、灰になり給はむを見奉りて、今はなき人と、ひたぶるに思ひなりなむ」と、さかしう宣ひつれど、車よりも落ちぬべうまろび給へば、「さは思ひつかし」と、人々、もてわづらひ聞ゆ。

【口訳】

「御なきがらを眼前に確かに見て、まだこうしてこの世においでなさる、そう思うのが何ともはかないことだからして、なきがらの灰になっておしまいになるのを眼前にお見申し上げて、今はこの世にない人だとひたすらに思い定めることができるようになりましょう」と、母の北の方はきっぱりと、けなげにおっしゃったのだけれども、その時になると、車から今にも落ちそうによるるとなすっているから、「こんなふうにおなりになろうと思っていたことだ」と、人々はその扱いに困ってしまっている。

【語釈】

「さかしう宣ひつれど」 きっぱりと、けなげにおっしゃったのだけれど。  
「まろび給へば」 まろよるとなすっているからして。「まろぶ」というのは転ぶことだが、この場合は、車から落ちそうに、足元も定かでない様子。

【評釈】

「なほ思ひつかし」と、人々はもてわづらひ聞ゆ。  
更衣の母が最後の火葬の場まで来るといふことは、実は予定になかったことなのである。でも、煙になって失せていく様を自分の目で見届けたいという

気持ちもあり、なお娘のなきがらと別れることが耐えられなくて、女房たちの車を追いかけて乗せてもらってやってきた。しかし、人々は、そんな最後の愁嘆場を御覧になっても思っていて、実は家にとどまっていらっしゃればよかったのにも思っている。